

# 内務官僚と 原内相 対決する

岩瀨 ここまで話を昭和時代に戻そう。

編纂部 岩瀨先生、いまの政治家が原敬・大森毅・尾崎行雄などの政治家をどれだけ研究しているか、ちよつと追求してみたいのです……

岩瀨 三十七年の第四〇国会で、池田勇人内閣は政治的暴力行為防止法案を民主秩序保持法案に肩替りしようとしたんですよ。それも実力者と相談した結果やめて、慎重論でオジャンにした。僕はこれについて思い起こすことが一つある。

齋藤 原敬のことですか。

岩瀨 そうだ。明治二十九年一月、第二次西園寺内閣が成立すると、原敬は初めて内務大臣になった。それも日本の官僚

官以下山県系で固まっているから、何が出来るかという、シンカフ論笑している。

齋藤 そつと、原敬が五十一歳で内務大臣となり、親任式の翌日、原が黒紋付に白タビ姿で登庁したとき、門番から小使まで、革命でも起こったかのようだったという。

岩瀨 原は一週間ぐらいじつと怖えていたが、一週間が経つと、突如、山県系の官僚、つまり大官、局長以下地方長官の二十四人を一斉に首切つちやうとした。だてに黒紋付に白タビをはいていたわけじゃない。そのとき原が抜擢されたのが末次竹二郎、水野錬太郎……の政治友会の大幹部です。そして首を切られた山県系の残党は、憲政会から民進党へ行ったんだ。

齋藤 新大木が就任するつと、山県系官僚の首切りとは

岩瀨 誰でも知っていることだが、五・一五とか、二・二六の前後に、西園寺の相談相手になった原、その頃の山県系、内務大臣になった人たちが、一木斎藤や淺見平兵衛、いわば山県系の官僚なんだ。世間ではこの人たちは非常に公平だといっているが、実際は山県系の官僚の本流を継いだ人たちがな

岩瀨 原敬はありきたりの大臣と思つたら、大まちがいだ。原敬はそつとにおいて、最初の国会に地方制度改革案を提出した。郡制廃止案ですね。県と町村との間に郡というのがあった。自治体としての郡制があった。この廃止案を提出したわけですよ。日本の地方制度といものは、明治二十三年に山県がつくった。内務大臣の山県の下に平田東助、一木斎藤、山県系官僚によつてつくられた地方制度に、原敬が真っ向から大ナタをふるつたわけだ。片一方、山県系官僚の首を切り、つづいて地方制度に向かつて改革案を出す。それで、最初の国会で全会一致で衆議院を通過した。

# 糠に釘

松原正

東京新聞七月十五日附の「大波小波」欄の筆者は、粕谷一希氏を罵倒した江藤淳氏の「ユダの季節」(新潮)八月號についてかう書いてゐる。

江藤とあつた者が、山崎(正和)はともかくとして、なぜ粕谷のごとき罵け出し評論家にこれほど腹を立つたのかは、少し考へてみる価値のある問題でせう。

粕谷一希は編輯者としては有能な人だつたと評判ですが、じつは当時大変に困つた癖がありました。裏に廻つて作家や評論家を撮る(この好きな人だといふのがもつぱらの癖で、(中略)仕掛け人たることは編輯者の名譽ともいへませんが、中央公論社をやめて人を撮る手掛りを失ふと、今度はあ

東文化財団で山崎正和と共に役員になり、江藤淳から「この『徒党』の構造は圓環をなしてゐる」と指摘されるやうな(中略)八月號に於けるやうになつたやう

はここで一つ預言しておきたいのである。すなはち、編輯者として「困つた癖がある」といふもつぱらの癖だ。この「中央公論社をやめて人を撮る手掛りを失ふと八月號に於けるやうになつた」と、かうまで酷い事を言はれても、粕谷氏は決して反論しないであらうといふ事だ。なぜ反論しないか。反論しないほうが勝ちからである。「粕谷一希氏」は、果して評論家なのか、編輯者なのか。あるいはまた、

は(中略)「預言」しておきたいのである。すなはち、編輯者として「困つた癖がある」といふもつぱらの癖だ。この「中央公論社をやめて人を撮る手掛りを失ふと八月號に於けるやうになつた」と、かうまで酷い事を言はれても、粕谷氏は決して反論しないであらうといふ事だ。なぜ反論しないか。反論しないほうが勝ちからである。「粕谷一希氏」は、果して評論家なのか、編輯者なのか。あるいはまた、

いづれ七十五日後には、粕谷一希擁護の風潮を醸成する事になるであらう。それからあらぬか地獄耳ならぬ私の耳にも、江藤淳氏についての隘口がさういふ「新種」の変わり種が棲息してゐるのである。それは「評論家」の看板を掲げながら駄文を書き綴り、「裏に廻つて作家や評論家をシャーパーリストを採り、「論議を編輯」する事だけを生甲斐としてゐるのである。いはば論

# 「粕谷一希、読むべからず」

いづれ七十五日後には、粕谷一希擁護の風潮を醸成する事になるであらう。それからあらぬか地獄耳ならぬ私の耳にも、江藤淳氏についての隘口がさういふ「新種」の変わり種が棲息してゐるのである。それは「評論家」の看板を掲げながら駄文を書き綴り、「裏に廻つて作家や評論家をシャーパーリストを採り、「論議を編輯」する事だけを生甲斐としてゐるのである。いはば論

「粕谷一希、読むべからず」

いづれ七十五日後には、粕谷一希擁護の風潮を醸成する事になるであらう。それからあらぬか地獄耳ならぬ私の耳にも、江藤淳氏についての隘口がさういふ「新種」の変わり種が棲息してゐるのである。それは「評論家」の看板を掲げながら駄文を書き綴り、「裏に廻つて作家や評論家をシャーパーリストを採り、「論議を編輯」する事だけを生甲斐としてゐるのである。いはば論

「粕谷一希、読むべからず」

いづれ七十五日後には、粕谷一希擁護の風潮を醸成する事になるであらう。それからあらぬか地獄耳ならぬ私の耳にも、江藤淳氏についての隘口がさういふ「新種」の変わり種が棲息してゐるのである。それは「評論家」の看板を掲げながら駄文を書き綴り、「裏に廻つて作家や評論家をシャーパーリストを採り、「論議を編輯」する事だけを生甲斐としてゐるのである。いはば論

# 地方制度の ルーツは山県有朋

岩瀨 原敬は原敬政務に負けやしない。

岩瀨 原敬はありきたりの大臣と思つたら、大まちがいだ。原敬はそつとにおいて、最初の国会に地方制度改革案を提出した。郡制廃止案ですね。県と町村との間に郡というのがあった。自治体としての郡制があった。この廃止案を提出したわけですよ。日本の地方制度といものは、明治二十三年に山県がつくった。内務大臣の山県の下に平田東助、一木斎藤、山県系官僚によつてつくられた地方制度に、原敬が真っ向から大ナタをふるつたわけだ。片一方、山県系官僚の首を切り、つづいて地方制度に向かつて改革案を出す。それで、最初の国会で全会一致で衆議院を通過した。

岩瀨 貴族院が反撃に出るね。岩瀨 そつと、貴族院は山県系

あ、地方制度改革案にしても、内務省の人事異動にしても、政治的意味からいって、山県有朋の旧勢力に対する挑戦であつた。その政策を通すのに、原敬は一つの信念をもつてゐた。

編纂部 ああ、米騒動の直後で、日本の皇室財産はロシア皇帝につく第二位で、原敬はこれに着目し、これを民間に放出すべきだと主張した。この皇室財産のカギを握つてゐるのは山県だつた。そこで原敬は「大三の回は方七十里、民以て

# 平民宰相の 波乱の生涯

岩瀨 やつぱり政治家は信念をもつて、利口であるよりはバカでもいい、信念をもつてつらぬべきですね。そつと、原敬の生きまは立派だつたと思つた。

齋藤 原敬の話ですがね。そのころ後藤新平が、原敬と肩を並べていた。それで後藤が天下を取るか、原敬が天下を取るか。そのときは今と違つてもいいわけだ。そこで、私は小雑誌に後藤新平は殺されたいけれども、原敬は殺されたいと書いた。というは、当時、赤化防止団という団体があつて、また、後藤の所へ取り込みをかけ、その金にして何百万円というやつでしようね、みんなこわしてしまつた。後藤新平が驚くのは当然でしょう。標々、ちやうど、ところが原敬という人物は、そんな噂かしかかかんて聞かなくて、だから噂かしかかかんから殺されるというわけだ。政治家といふものは、そつと運命の星の下に生まれた人間だと思つた。

岩瀨 それでいいんだ、いいんだ。

齋藤 それにしても、あの二・二六事件後には、政治家に勇気のある者がいなくなつた。暗殺された高橋長清、斎藤寅次郎

Q. あなたにとってネクタイとは?

## 成功への武器

おかげさまで創業30周年。皆様のおかげでますます発展しています。心新たに飛躍を遂げます。

ジョン・D・モロイ氏はその著「ドレス・フォー・サクセス」で、「ネクタイを正しくつけていることが、ビジネスや人生の成功を約束するものだと信じていません。きちんとした人間であることの証明にはなるのです」とネクタイの重要性を語っています。やはり、男にとってネクタイは、成功への強力な武器となるもの。サクセスフルなタイをいつもVゾーンにどうぞ。

HI-SHIYA